

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

オウレン *Coptis japonica* (Thunb.) Makino (キンポウゲ科 Ranunculaceae)

「良薬，口に苦し」と昔から言われています。その言葉どおり本植物の根茎はとても苦く，古くから苦味健胃薬として使われてきました。それもそのはず，根茎には殺菌作用や抗炎症作用のあるベルベリン berberineをはじめ palmatine, coptisine などのベンジルテトラヒドロイソキノリンアルロイドが含まれていて，それらの成分がとても苦く，下痢，腹痛，消化不良などに良く効くそうです。ベルベリンはその他，オウバク（黄柏：キハダの樹皮）やメギ科植物にも含まれ，百草丸，陀羅尼助のような健胃整腸薬にはオウバクが使用されています。漢方ではオウレン（黄連）は実証タイプの人の高血圧症などによく使われる黄連解毒湯（構成生薬：オウレン，オウバク，オウゴン，サンシシ）などに配合され，のぼせ症状の治療薬として鼻血，赤面，動悸，情緒不安などに用います（清熱・燥湿・解毒）。

オウレンの根茎は黄色く多数のひげ根を出して地下を斜めに走り，葉は根茎の先端部に叢生し，3出複葉で長い柄があり，早春，新葉に先だって花茎を伸ばし，その先端に直径約 1 cm の白い花を数個，横か上向きにつけます。複葉の形によって，キクバオウレン（1回3出複葉），セリバオウレン（2回3出複葉），コセリバオウレン（3回3出複葉）の3種類があり，その他，高山には小型のミツバオウレンもありますが，一般にオウレンといえば，キクバオウレンを指します。

キクバオウレンは北海道南西部と本州に分布し，山地の樹林下の湿ったところに良く生え，高さ 15～40 cm になる常緑の多年生草本です。花をよく見ると，雄し



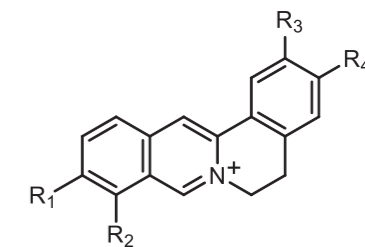
写真1 オウレン（両性花）



写真2 オウレン（雄花）



写真3 オウレン（黄連）



| | R ₁ | R ₂ | R ₃ | R ₄ |
|-----------|------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| berberine | OCH ₃ | OCH ₃ | -O-CH ₂ -O- | |
| palmatine | OCH ₃ | OCH ₃ | OCH ₃ | OCH ₃ |
| coptisine | | -O-CH ₂ -O- | | -O-CH ₂ -O- |

berberine の構造式

べと雌しべの両方を供えた花（両性花）と雄しべだけの花があり，稀に雌しべだけの花もあるそうです。また葉を良く観察すると，葉柄の中央脈が2本くっついたような形をしています。これはシダ植物やイチョウなどに見られる二又分岐の名残りと考えられます。さらに，果実は袋の先が空いたようになっています。これは胚珠が子房に包まれていることが被子植物の特徴なのですが，オウレン属植物はこの被子状態が不完全で原始的な形質を留めていることになります。

何年か前，埼玉県飯能市から日高市へ連なる物見山～日和田山～金刀比羅神社～巾着田～高麗駅へぬける奥武蔵自然歩道コースを歩いた時にオウレンの群生地を見かけました。これは，その昔，オウレンが栽培されていた名残ではないかと思っています。